都道府県別賞一等

我が家の控除証明書

愛媛県　愛媛大学教育学部附属中学校　三学年

弘松　詩菜

毎年年末が近づくと、ポストに保険会社からの控除証明書が何枚も届く。父の仕事の関係で、我が家の保険の数は普通より多いと思う。なぜそんなことを知っているかというと、母が「多いなー。」と控除証明書をトランプのように広げて眺めているからだ。けれど私は、あのハガキが何を意味するのか、まったくわかっていなかった。

ダイニングテーブルの椅子に座って、母が単身赴任中の父と電話していた。「定期検診で、あと五年くらいしたらまた手術しないといけないかもしれないって言われた。」と。テレビを見ていた私の耳がその母の声を拾った。「また」という言葉。母は私が四歳の時に心臓の手術をしている。ただ、私は幼すぎて、母が入院していて家にいない時期があったということぐらいしか覚えていない。急に倒れて運ばれたとかではない。階段を上がるだけで息が切れるようになり、検査をして、定期的に通院するようになった後、手術を勧められたのだという。手術は岡山の病院で行われた。大きな手術だったと、もう少し大きくなってから聞いた。週に一度だけ岡山に会いに行った。寂しかったと思う。

母にあの頃のことを聞いたら、手術に絶対はないという誓約書にサインをした時、『万一のことがあるかもしれない』そう思ったという。そして手術の前日、真っ白で綺麗な個室のベッドで一人眠れずに、まだ幼かった私と兄に宛てて長い長い手紙を書いたのだと、笑いながら話してくれた。

そして、「一カ月以上も個室に入院したら、すごくお金がかかるんだよ。」と教えてくれた。「けれどうちは、保険に複数加入しているから、個室に入院しても差額を気にしなくてよかった。」とも言った。高額療養費制度で手術の費用はカバーされ、民間の保険の給付金で入院費は「ちょっと黒字」になったと笑った。私はその話を聞きながらもやっとした気持ちになった。病気や命に値段をつけるようで、いいんだろうかと思ってしまう気持ち。けれど、その「黒字」が、母の快適な入院生活を支え、父がお金のことを考えずに、母の回復だけを思って待てるようにしてくれていたのだと思う。

父も話してくれた。「保険には以前から入っていたけれど、最初はそこまで深く考えていなかった。」と。付き合いもあり入っているだけのものもあった。でも母の手術を経て、保険は本当に必要なものだと実感したのだという。

「支払う保険料をもったいないと思ったことは、それ以来一度もない。」と。

保険のことなんて、今まで一度も考えたことがなかった。私の生活に関係あるものだなんて思ったこともなかった。けれど、深く、しっかりと私の家族に関わっていた。

母は、「手術をした後は、新しく入れる保険も限られるんだよ。」と言った。私はその時初めて、「備えは元気なうちに」とよく言われているということを知った。元気なうちでなければならない。けれど、災害時の備蓄品と同じように、なにも起きなければ〝もったいない〟という意識が出てしまうのもわかる。あの一カ月半を経て、父と母は保険はもったいないものではなく必需品であると実感していた。

次の手術が現実になる前に、私はもっと学ぼうと思っている。保険のこと、お金のこと、私たちの生活のこと。四歳の私は母の病気のことも、お金のことも、理解できていなかった。けれどあれから十年経った今の私は、手術も保険も自分のそばにあることとして、家族のそばにあるものとして考え、知ろうと思えるようになった。再手術をするその時、保険はどうなるのだろう、と。